

日本国際看護学会 第5回学術集会 ご案内 「レジリエンス！with/after コロナにおける多文化共生」

第5回学術集会大会長 近藤 暁子
東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科

春陽の候、会員の皆様方におかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日本国際看護学会第5回学術集会では「レジリエンス！with/after コロナにおける多文化共生」をテーマに開催いたします。オンラインを通じて世界中の研究者や活動家の方と情報交換できればと思います。まだまだafter コロナという状況にはならない可能性が高いですが、私たちの力を合わせてこの状況乗り越えて行ければと思います。

コロナの状況により2020年は外国人の訪日数は激減しましたが、今後も私たちは国際化に対応していく必要があります。また、言うまでもないことですが、このような世界的なパンデミックに対応するためには、日本だけで対応できることではなく、世界の国々と情報交換して協力する必要があります。日本は地理的影響や言語の壁からなかなか外国人と接する機会がなく、外国人との対応に慣れていない場合も多く、国際化に抵抗を感じている人々も少なからずあるのではないかと思います。このような状況中で本学会としては日本国内と国外の活動や知見を橋渡しする役割があるのではないかと感じております。

私は前大会長の伊藤尚子先生のような開発途上国での活動経験はないのですが、米国留学の経験から、米国の研究者と共同研究を行ったり、オンラインを使用してワシントン大学と共同講義を行っています。現在調査を行っているのは、コロナウイルス流行下における看護学生のコントロール感と健康行動とに関連についての日米比較です。コントロール感とはあまり聞きなれない方も多いかと思いますが、欧米ではコントロール感が高いほど健康管理能力が高いという多くの研究結果が出ています。また先行研究から、日本人は世界の他の国の人々に比べてレジリエンスやコントロール感が低いという報告がありますが、これは日本の文化と関連があるのではないかと考えられています。しかし、日本人の急性冠症候群の患者を対象とした私どもの調査結果から、レジリエンスが高いほどコントロール感が高く、コントロール感が高いほど健康関連生活の質が高いという分析結果になっています。一方で日本は世界の中でも屈指の長寿国であり、レジリエンスやコントロール感は低くても、私たち自身が気づいていない強さがあるのではないかと考えられます。今後はこのような日本人の強さをもっと世界に発信していけると良いのではないかと思います。そのためにも、英語＝国際化ではありませんが、何らかの方法で私たちのコミュニケーション能力を上昇させ、世界の人々との協力体制を整えていく必要があると考え、日々微力ながら活動しています。

私が米国留学時、大学院の教授から指摘されたことは、日本の看護研究者は伝統的に海外の知見を日本語に訳すのが仕事のようなことでした。留学経験があるという今「通訳」としての役割を求められることが少なくありません。このような状況を一刻も早く克服しなければ私たちは世界から取り残されるのではないかと懸念しております。もっと日本の質の良い看護を世界に発信していくことが重要と考えます。東京医科歯科大学大学院国際看護開発学分野においては国際化に対応するために英語で講義を行っています。留学生の数が年々上昇し、私も大学院で留学生を受け入れています。留学生は日本語のみならず英語も堪能な優秀な学生が多く、日本人の学生にとっても良い刺激になっています。

本学会は比較的小さいコミュニティではありますが、共通の興味と目標を持った人々の集まりだと思います。パンデミックの状況であるからこそ皆さんと団結してこの危機を乗り越えたいと思います。学会でお会いできるのを楽しみにしています。